
ドイツ語のマナー本に見る言語意識

なにが悪いドイツ語とされたのか？

田中 翔太

1. 言語意識の通時的变化

言語に関する意識は変化する。1960年代初頭に渡独し、のちにドイツ国内に定住したトルコ系移民の人びとが話すドイツ語に対する評価の変化も、その一例である。トルコ系移民が話すドイツ語は、長い間ドイツ社会から「悪いことば」という評価を得ていた。というのも、トルコ系移民のドイツ語は、標準的言語規範からの逸脱が否定できない言語変種であったからである。ところが、1995年にトルコ系移民の出自を持つ作家 Feridun Zaimoglu により移民の声を集めた本 Zaimoglu (1995) が出版されると、ドイツ社会から移民の話すことばに注目が集まる。それを分岐点として、2000年代に入ると、ドイツのポップ音楽(RapやHip Hopなど)では移民背景を持つ歌手が登場し、またTVメディアにおいて、移民を主人公に配置するコメディ番組が量産されるようになる。これら一連の事象の帰結として、現今では一部のドイツ人から、「トルコ系移民のドイツ語」に対して「coolなことば」であるとした評価が与えられている。あくまでドイツ人の一部の若者においてではあるが、「トルコ系移民のドイツ語」に対する価値意識の転換が生じた¹⁾。

このように、特定の言語表現・言語変種を「良い、悪い」とする評価は、どのような話者が、どのような状況下で、誰と、どのような社会的背景のもとに使用するのかによってその判断が変わりうるし、言語外的な要因によって、通時的にその評価に変化が見られるものである²⁾。

1) この点について詳しくは、田中(2011, 2012)を参照。
2) この点について詳しくは、Mattheier(1998)を参照。

2. 過去のマナー本

2.1. 言語意識の史料としてのマナー本

本論文では、過去 200 年の間にどのようなドイツ語が「悪い」ドイツ語とされたのかについて、言語意識³⁾の観点から考察を行うものである。その際分析対象とするのは、ドイツ語圏で出版されたマナー本である。マナー本のなかでも特に、言語に関する記述の多いものを選び、そこから「悪いドイツ語」のサンプルを抽出していく。

Linke (1988)ではマナー本について、次のような定義が与えられている。

マナー本は、特定の社会グループにとって指標となるモデルとして役に立つ行動規範の理想型を表す。しかしそれは、実生活の相互作用の形式と合致する必要は全くない行動規範の理想型である。(Linke 1988: 126)

つまり、マナー本は必ずしも現実の言語行動に即さない、ある意味「こうあるべき」という理想的規範が反映された本であるということである。また、マナー本の役割についても、Linke (1988)は説明を与えている。

マナー本は、基本的にふたつの役割を果たす。一方で、社会的に成り上がった人びとに、自らが入っていきたく思っている社交界において一般的な、不慣れた慣習と規範を伝える手引書の役割である。他方で、特定の社会集団の自己表現と、アイデンティティの保護のためになる社会的入門書の役割である。その際、場合によっては危機に瀕した規範と慣習が、文字による定着を通して保護し、維持される。(Linke 1988: 126f.)

以上が、Linke (1988)によるマナー本が果たす役割と、読み手に与える機能である。

それでは、マナー本の書き手、すなわち著者はどのような背景を持った人物な

3) ここで筆者が想定する言語意識 (Sprachbewusstsein) とは、Mattheier (1998)による分類に基づいている。すなわちここで観察するのは、「コミュニケーションのための心的傾向、態度、理論における変化」(Mattheier 1998: 5)である。

のだろうか。本論文で分析するマナー本の著者の多くは作家で、また、女権拡張主義者の背景を持つ人物もひとり見られた。さらに今回は言語に関する記述の少なさから分析対象からは外したが、マナー本の著者には学校の教師やダンス教師などの人物もいる。ここから分かることは、マナー本の著者は言語の専門家（文法学者、言語学者など）としてではなく、素人として言語に対して良し悪しの評価を与えているという点である。過去の「悪いドイツ語」についてはすでに、Davies/Langer (2006)において研究がなされているが、ここでは文法学者・言語学者という言語に関する専門家たちの言語意識が問われている。それとは異なり本論文では、言語に関する専門家とは言えないマナー本著者の言語意識から見た「悪いことば」、すなわちより一般的な言語意識から見て、何が「悪いドイツ語」とされていたのかを分析したいと思う。

2.2. 分析対象とするマナー本

本論文で分析対象とするマナー本は、1797年から1941年の間に出版された計17冊である⁴⁾。このおよそ19世紀から20世紀半ばの時期を対象を絞った理由は、大きく分けて3つある。第一に、ドイツ語の歴史を見た際に19世紀という時代は特にドイツ語を取り巻く状況に大きな変化が見られた時期だからである。1850年、60年代の産業革命を通じた工業化は、「人口の急激な増大と並行して、人口の急激な都市集中化」（シュミット 2004: 298）を呼び起こした。それにより、「人口の移動が激しくなり、あらゆる社会集団の人々が互いに出会うことになった。そのため、人々はそれまで出会ったことのない、急激に変化していくコミュニケーションの状況[...]だけではなく、新しいコミュニケーションの内容も短期間のうちに身につけていかなくはならなかった」（シュミット 2004: 298）。さらにPolenz (1999)によると、「広範囲に及ぶ文化社会的な変化を通して、コミュニケーションの必要条件も変化し、目的に条件づけられた、また生産者や社会グループに条件づけられた新たな公的なテキスト種が誕生した」（Polenz 1999: 3）。第二に、19世紀は人々の言語に対する意識も変化の兆しを見せた時代である。「19世紀における[...]社会的変化と近代市民層の興隆によって、とりわけ言語に対する批判的な意識も一層強力に台頭」（シュミット 2004: 299）した。特に19世紀後

4) 具体的な書誌情報については、一次文献一覧を参照。

半において、多くのエリート層に属す保守派の言語批判者が、ドイツ語の「墮落」、「荒廃」、「通俗化」を指摘し批判した (Polenz 1999: 3 を参照)。第三に、20 世紀中葉という区切りは、「新高ドイツ語」から「現代ドイツ語」への過渡期に該当する。本論では現在もなお変化を続けるドイツ語の規範変遷を追うのではなく、あくまで過去において「悪いドイツ語」とされた対象を観察することを目的としたため、分析対象を「現代ドイツ語」以前までに区切ることにした。

3. 「悪いドイツ語」とされた言語現象

1797 年から 1941 年の間に出版された計 17 冊を分析した結果、この時代のマナー本において「悪いドイツ語」とされた言語現象は大きく分けて 4 つに分類することができることが分かった。以下、詳しくどのような形で「悪いドイツ語」に関する記述がマナー本に掲載されていたのかを、例を示しながら説明していく。なおそれぞれの例に対して、「悪い」とされた対象について二重下線 (____) を、またその対象に対してそれぞれのマナー本著者が与えた価値評価については一重下線 (____) をそれぞれ引いている。さらに例示の順序については、分析対象としたマナー本の出版年の順になっている。

3.1. 地域方言

マナー本においてまず見られた「悪いドイツ語」に関する記述は、地域方言についてである。主に話す際に話者が地域方言を使用することを良しとせず、話の聞き手にとって「とても不快」(Claudius 1800: 71) であるとか、「とりわけ滑稽に聞こえる」(Gontard 1904: 11) などの評価が与えられていた。しかしながらここで気がつくのは、一方でマナー本著者は話し手、あるいは書き手が地域方言を使用すべきでないとして記述しつつ、その使用状況に関する具体的な解説をまったく行っていないことである。具体的に誰とどこで話す、あるいは書く際に地域方言を使用することが「悪い」のか、あるいはどのような状況においては特に「悪く」、どのようなコミュニケーション状況だと比較的許容されるのかなどを記述した例が抜けているため、どのコンテキストに関する発言であるかは不明のままである。

出版年	内容
1800	<p>[...] Auch ist es <u>sehr auffallend</u> von vornehmen, auf Bildung und guten Ton Anspruch machenden, Männern <u>den Provinzial-Dialekt</u> zu hören, [...]. Dem gemeinen Mann vergiebt man das; von Herren und Damen klingt so etwas hingegen einem gebildeten Ohre <u>sehr widerlich</u>. (Claudius 1800: 70f.)</p> <p>[...]教養や良い礼儀を求める身分の高い男性から、<u>田舎の方言</u>を聞くこともまた、とても目立つことだ。[...]並みの男性に対しては容赦する；それに対して、紳士淑女からそのような方言を聞くことは、教養のある人の耳にはとても不快である。</p>
1815	<p>In der deutschen Sprache giebt es so viele <u>Mundarten</u>, als es verschiedene Provinzen giebt, <u>ein Uebelstand</u>, den wir in allen Ländern finden, [...]. (Nicolai 1815: 87)</p> <p>ドイツ語には、さまざまな地方があるのと同だけの数の<u>方言</u>が存在する。これは、全ての地方に見出される<u>悪弊</u>である[...]</p>
1891	<p>Man soll sich <u>keine Dialekte angewöhnen</u>. (Kallmann 1891: 14)</p> <p><u>方言の習慣をつけるべきではない。</u></p>
1897	<p>Spricht man <u>stark Dialekt</u>, so <u>suche</u> man ihn durch deutschen Sprachunterricht zu <u>verbessern</u>, verfallt aber nicht in den Fehler, ein gezieltes Hochdeutsch zu sprechen. (Wedell 1897: 73)</p> <p>もし<u>きつい地域方言</u>を話すならば、ドイツ語の授業を通して改善しようと<u>努めなさい</u>。しかしながら、気取った高地ドイツ語を話すような失敗には陥らないようにしなさい。</p>
1904	<p>Eine wohlthuende reine klare Stimme ist etwas <u>schönes</u> bei einer Dame. Bemühe sie sich, ein gutes Deutsch zu sprechen, weil <u>scharfer, ausgeprägter Dialekt</u> aus Damenmund <u>besonders lächerlich</u> klingt. (Gontard 1904: 11)</p> <p>心地よく純粋で澄んだ声は、淑女にとっては美しいものだ。良いドイツ語を話すよう、努力しなさい。というのも、淑女の口から出る<u>きつく顯著な地域方言</u>はとりわけ滑稽に聞こえるから。</p>
1918	<p>Man beherrsche seine Sprache und vermeide auch im alltäglichen Umgang <u>breiten unschönen Dialekt</u>, wie man sich auch keine burschikosen Sprüche und Ausdrücke angewöhnen soll. (Gratiolet 1918: 21)</p> <p>ことばをきちんと使いこなし、日常的な交際において<u>無作法で美しくない方言</u>を避けなさい。また同様に、不作法な決まり文句や表現を用いる習慣もつけるべきでない。</p>
1932	<p><u>Sehr gut</u> ist es, wenn die Hausfrau auf eine gewählte und möglichst <u>dialektfreie Sprache</u> ihrer Angehörigen achtet. Kinder hören oft auf der Straße, von Schulgenossen, Dienst- und Handelsleuten derbe Worte und benutzen sie mit Vorliebe untereinander. Es ist die Pflicht einer guten Mutter, dieser Unart energisch vorzubeugen. (Gleichen-Russwurm 1932: 66f.)</p> <p>とても良いことは、主婦が家族の洗練された、可能な限り<u>方言のないことば</u>に心を配ることだ。子供たちはよく、街中で、同級生から、駅夫や商人から粗野なことばを聞き、特に好んで仲間内でそのことばを話している。良き母親の義務は、この悪い癖を断固として防ぐことである。</p>

3.2. 文法

次に見られた「悪いドイツ語」に関する記述は、文法についてである。文法のなかでも特に、会話中に話者が3格と4格を混同して話すことに対し、「それらの誤り」(Volkland 1941: 95)といったような言い方をし、3格と4格の混合が「文法的に正しい」(Nicolai 1815: 89)ものではないとする記述が複数見られた。しかしここでも地域方言の時と同様に、具体的なコンテキストが示されていない。この箇所に関してマナー本から得られる情報は、3格と4格を話す際、あるいはBaudissin (1901)の例のように、口頭という記述もなく、ただ単に混合するのは正しくないということだけである。

出版年	内容
1815	<p><i>Grammatisch richtig zu sprechen, wird mit Recht von jedem gebildeten Manne gefordert. Jede Versümmiß darin wird bemerkt und als eine Unachtsamkeit auf uns selbst, oder als Unwissenheit ausgelegt. [...] – Manchen Leuten soll es ein Air noble geben, sich um die Kleinigkeiten, wie sie bei ihren großen Armseligkeiten es nennen, des »mir« und »mich«, des »sie« und »ihnen« nicht zu bekümmern, [...] (Nicolai 1815: 89)</i></p> <p>文法的に正しく話すことは、どの教養のある男性にも当然のことながら求められることである。この点で手抜きをすると必ず気がつかれ、我々が自身のことに対して配慮が足りないこと、あるいは無学なこととして捉えられる。[...] – 「mir」と「mich」、「sie」と「ihnen」のような些細なこと（このように彼らは悲惨なことを言い換える）を気にかけないことが高貴な態度であると考える人もいるということだ。</p>
1901	<p><i>Man soll, selbst im Scherz, ein Fauteuil, Portefeuille und ein Feuilleton <u>ebensowenig mit einander verwechseln wie mir und mich.</u> (Baudissin 1901: 331)</i></p> <p>冗談であっても、肘掛けつきの安楽椅子 (Fauteuil) と職務 (Portefeuille)、学芸欄 (Feuilleton) とを混同すべきではないのと同様に、<u>mir と mich</u> を混同すべきではない。</p>
1941	<p><i>Wir wollen hier nicht von falschem Sprechen, von <u>einem Verwechseln von mir und mich</u> und andern bösen Verstößen gegen die Grammatik reden, denn, daß jemand, der gewandt reden oder plaudern will, von <u>solchen Fehlern frei sein muß, ist selbstverständlich.</u> (Volkland 1941: 95)</i></p> <p>ここで我々は、間違った話し方、<u>mir と mich</u> の混同について、そして他の文法に対する粗悪な違反について話したいのではない。というのも、巧みに話したい、あるいは巧みに雑談したい者が、<u>それらの誤り</u>なしでいないといけなことは、自明のことであるからだ。</p>

3.3. 外来語

3つ目の特徴としては、外来語の使用に関して「悪い」とされている点だ。こ

ここではとりわけ女性に対して、外来語を誤って使用する傾向にあり、それは聞き手にとって「滑稽」(Ernst 1884, Calm 1886)に聞こえるという記述が見られた。しかしながら以下の7つの例を見ても分かるように、外来語についても具体的なコンテキストが示されず、ただ外来語の誤用に対して「悪い」という評価が与えられているのみである。

出版年	内容
1884	<p><i>Beim Sprechen Fremdwörter zu gebrauchen, ist keine gute Angewohnheit; junge Damen denken bisweilen, damit zu prunken und sich dadurch den Eindruck der Belesenheit zu geben, aber unsere schöne deutsche Muttersprache ist gottlob so reich an guten Ausdrücken, daß sie dieser Beimischung nicht bedarf. Französische und englische Wörter sind möglichst zu vermeiden, und dann geradezu lächerlich, wenn die Sprecherin sich nicht ganz sicher in der Aussprache derselben fühlt oder sie nicht an der passenden Stelle anwendet. (Ernst 1884: 68)</i></p> <p>話す際に外来語を使用するのは、<u>良い習慣ではない</u>。若い淑女は時として、外来語をひけらかして博識な印象を与えようとする。しかし我々の美しい母語であるドイツ語は、ありがたいことに良い表現が豊富にあるので、このような混合は要さない。フランス語と英語の語彙は可能な限り避けるべきである。とりわけ話し手の女性がそれらの語彙の発音に関して不安であるか、適切な箇所で使用しない場合、それは<u>滑稽</u>である。</p>
1886	<p><i>Schlimmer aber noch als der Gebrauch der Fremdwörter ist der Mißbrauch, das heißt die falsche Anwendung derselben. Es ist merkwürdig, wie viele Menschen eine Leidenschaft für Fremdwörter haben, ohne die betreffenden fremden Sprachen zu kennen, wodurch sie sich die entsetzlichsten Verwechslungen zu schulden kommen lassen. Das weibliche Geschlecht besonders, das ja meist von der griechischen und lateinischen Sprache, welche die Mehrzahl der gebräuchlichen Fremdwörter liefern, nur eine sehr blasse Ahnung hat, zeigt diese Vorliebe; es denkt, das klinge gelehrt oder vornehm. Statt dessen klingt es einfach lächerlich. [...] (Calm 1886: 310f.)</i></p> <p>しかしながら<u>外来語の使用よりも悪いのは、誤用</u>である。すなわち、外来語の誤った使用だ。該当する異国のことばを知らずして（そのため、多くの人のもっとも恐ろしい混同を犯してしまう）、いかに多くの人が外来語に対して情熱を持っているかは奇異なことだ。一般に用いられている外来語の大半を占めるギリシャ語やラテン語について、ぼんやりとした知識しか持ち合わせていない女性は、とりわけこの傾向が強い。なぜなら、博学あるいは高貴に聞こえると、彼女たちは考えているからだ。しかし実際には、<u>ただ滑稽に聞こえるだけなのだ</u>。[...]</p>
1891	<p><i>Man soll beim Sprechen nicht zuviel Zitate und Fremdwörter anwenden. (Kallmann 1891: 15)</i></p> <p>話す際に、引用や<u>外来語を過度に使用すべきではない</u>。</p>

出版年	内容
1894	<p><i>Mische Deine Reden nicht mit <u>Fremdwörtern</u>; dies ist einerseits sehr abgeschmackt, andererseits kommst Du in Gefahr, ein Fremdwort am unrechten Platze oder in unrechtem Sinne anzuwenden und machst Dich dadurch lächerlich.</i> (Vogt 1894: 85)</p> <p>あなたの話に、<u>外来語</u>を混ぜないこと；これは一方でとても悪趣味で、他方で不適切な箇所、あるいは正しくない意味で外来語を使ってしまう危機に陥るからだ。それによってあなたは自分自身を滑稽にしてしまう。</p>
1897	<p><i>Wer nicht genau den Sinn und die Orthographie des <u>Fremdwortes</u> kennt, das er anwenden will, unterdrücke es lieber ganz. Es kommt vor, daß die scheinbare Gelehrtheit unverhüllten Spott einträgt.</i> (Wedell 1897: 75)</p> <p>自分が用いようとする<u>外来語</u>の意味と正書法を正確に知らない者は、外来語を我慢した方がよい。<u>うわべだけにしか学識がないことがむき出しの嘲笑を集める</u>ということが起こるからである。</p>
1901	<p><i><u>Fremdworte</u> zu verdrehen oder falsch anzuwenden, halten auch viele für äußerst witzig, für revanchieren sagen sie retouchieren und für diskutieren sagen sie diskontieren.</i> (Baudissin 1901: 331)</p> <p>例えば revanchieren (復讐する) を retouchieren (修整する) と言ったり、diskutieren (議論をする) を diskontieren (割引する) と言ったりして、<u>外来語</u>をねじまげたり誤って使用することを、多くの人がまた極めて滑稽だと見なす。</p>
1929	<p><i>Sprich richtig und ein reines, gutes Deutsch. Sei vorsichtig in der Anwendung von <u>Fremdwörtern</u>.</i> (Roeder 1929: 14)</p> <p>正しく、純粋で良いドイツ語を話さない。<u>外来語の使用</u>においては、よく注意しなさい。</p>

3.4. 発音

そしてマナー本において「悪い」とされた4つ目の言語的特徴は、発音についてである。発音のなかでも特に音節を飲み込むことはす「べきではない」(Kallmann 1891: 13) や、「避けなさい」(Vogt 1894: 85) といった著者からの助言が書かれている。ただし、音節を飲み込むことにより、コミュニケーションにどのような齟齬をきたすのかなどについてはそれぞれのマナー本で一切記されておらず、読み手は漠然と音節の飲み込みを「するべきではない」対象として認識できるだけである。また、具体的にどのような場所で、どのような時に、誰と話す際に音節の飲み込みがいけないのかが明記されておらず、例えば家族や恋人同士のような聞き手との心的距離が比較的近い状況と、公的な場面で話すような聞き手との心的距離が比較的遠い場合の状況の違いなどが明確に区別されていないのだ⁵⁾。これ

5) この点について詳しくは、3.5を参照。

らの例から、ここでも具体的なコミュニケーション状況に関する記述が欠けていることが分かる。

出版年	内容
1891	<i>Man soll keine Silbe verschlucken.</i> (Kallmann 1891: 13) <u>音節を飲み込むべきではない。</u>
1894	<i>Sprich richtig. Vermeide alles Stammeln, Stottern, Verschlucken der Silben.</i> (Vogt 1894: 85) 正しく話しなさい。つかえながら話すこと、 <u>音節の飲み込みは避けなさい。</u>
1929	<i>Versuche mit aller Energie Dir das undeutliche Sprechen, das Lispeln, Anstoßen mit der Zunge, das Verschlucken oder Überstürzen der Worte abzugewöhnen.</i> (Roeder 1929: 13f.) あらゆる精力を注ぎ、不明瞭な話し方、舌のもつれ、舌のつまずき、 <u>語の飲み込みや慌てた発言をやめるよう心掛けなさい。</u>
1941	<i>Dazu zählt zunächst einmal das lässige Verschlucken einzelner Silben, die man bei hastigen oder nervösen Menschen beobachten kann, [...] →Guck' mal, die herrliche Fichte,« wollen sie ausrufen. Man hört aber »Ku ma ...« Das hört sich auf die Dauer entsetzlich an. – Oder sie wollen fragen: »Haben Sie vorhin ...?« und man hört: »Hammse vorhin ...?« – Statt »nicht wahr?« sagen sie »nich?« usw. (Volkland 1941: 95)</i> せわしない、あるいは落ち着かない人に観察できる <u>個々の音節の無造作な飲み込み</u> も、その一部とみなされる。[...]「Guck' mal, die herrliche Fichte」と、そのような人は突然大声で言おうとするが、実際には「Ku ma...」としか聞こえないのだ。結局これは、 <u>ひどいものに聞こえる</u> 。あるいは「Haben Sie vorhin...?」と尋ねようとして、実際にはこう聞こえるのだ：「Hammse vorhin...?」＝「nicht wahr?」の代わりに、「nich?」と言うなど。

3.5. 状況と媒体

以上、比較的言語に関する記述が多いマナー本を選定し分析しても、19世紀のはじめから20世紀半ばにかけて「悪い」とされたドイツ語は、第3章で叙述した、地域方言、文法、外来語、発音に関する内容のみしか観察することができなかった。またマナー本の著者からは、それらの言語的特徴に対してただ単に「悪い」という評価のみが与えられ、具体的なコミュニケーション状況の設定などはなされていなかった。すなわちマナー本の著者は、「悪いドイツ語」に関するごく一般的な見解しか述べていないのである。つまり、言語の専門家でないマナー本の著者が、自ら観察することばについて何が「悪い」とされるのかを考えた際に、彼

らが所有する言語意識は、本論で挙げたせいぜい4つの一般的な見解に集約されると言えるのではないだろうか。マナー本の著者は言語の専門家ではないため、「悪いドイツ語」について、どのような話者が、どのような状況下で、誰と、どのような社会的背景のもとにそれぞれ「悪い」とされるドイツ語を使用してはいけないのかといった、詳細な語用論的状况については明確に書かない傾向が強い。この、状況や場面について記されていないということは、翻って考えると、マナー本が一般的に（すでに見たとおり）「社会的に成り上がった人びとに、自らが入っていきたくて思っている社交界において一般的な」（Linke 1988: 126）慣習や規範を教える役割の「社会的入門書」（Linke 1988: 126）であるとすれば、マナー本で書かれている言語状況は当時の理想型としての社交界を想定していると仮定することができる。

また、マナー本の著者たちは「悪いドイツ語」を指摘する際に、それが話される口頭のことばとしてなのか、書かれることばとしてなのかを明確化していない。この点については、本論の3.4で触れた公的、あるいは私的な心的距離という概念が、当時の言語意識について考える際にひとつのキーワードになると筆者は考える。Koch/Oesterreicher（1985, 1994）では、話されることばと書かれることばが「文字（graphisch）」と「音声（phonetisch）」による、媒体の「単純な二分法で分類されて」（高田・椎名・小野寺 2011: 13）おらず、例えば媒体が音声であったとしても、「説法」や「学術的な講演」のように、「コンセプトとして書きことば的（konzeptionell schriftlich）」となる可能性があることを示した⁶。マナー本で想定されるドイツ語は、この考えに従うならば、媒体が文字や音声のどちらであったとしても、より書きことば的、すなわち聞き手、あるいは読み手から遠い距離を取ることが理想とされているのではないかと仮定できる。

4. まとめと展望

ドイツ語圏において、19世紀に言語批判（Sprachkritik）という分野が確立した。マナー本はさしずめ、この言語批判の分野における「素人言語学的な言語批判（Laienlinguistische Sprachkritik）」に含まれるだろう。すなわちマナー本においては、「非言語学者からほとんどの場合、論理的・体系的な根拠や、言語慣用の経験

6) この点について詳しくは、Koch/Oesterreicher（1985, 1994）を参照。

にもとづき保障された調査なしで述べられた、特定の言語規範に対する批判」(Kilian/Niehr/Schiewe 2010: 56) が根底にあり、そこから論が展開されているということになる。実際にマナー本を分析したなかで「悪い」とされる対象は4つしか見つからず、さらに具体的にどのような場所で、どのような時に、誰と話す、あるいは書く際にその対象を使用してはいけないのかという語用論的状况に関する記述も欠けていた。Davies/Langer (2006)において、言語学者の見地から詳細かつ網羅的に「悪いドイツ語」に関する記述がなされている点と比較すると、マナー本における「素人言語学的な」言語批判の特色が際立つ。冒頭部で述べた「トルコ系移民のドイツ語」についても、同様のことが言えるであろう。「トルコ系移民のドイツ語」に対して「cool なことば」として評価を与えた一部のドイツ人の若者は、数ある「トルコ系移民のドイツ語」の言語的特徴のなかでも、いくつかの語法（例えば方言語法やステレオタイプのな語彙）に限って評価を与え、その限りにおいて言語意識の変化が観察された。

ただしここで強調したい点は、言語の専門家ではなく、「素人」の一般的な言語意識の変化を観察することが、長期的な目で見た言語変化を見ることにつながる可能性のある点である。Milroy (1992)によれば、「改新 (innovation) と変化 (change) は概念として同じ事柄ではない。改新とは話者の行為であるが、一方変化は言語体系の内部において観察される」(Milroy 1992: 169)。すなわち言語の改新とは、話者が引き起こすものである。そしてその言語的改新をもたらす発端となる話者は、集団のなかで周辺のなところに位置しており、その話者による改新が、集団の比較的中心部にいる話者に伝わり、緩やかに採用される⁷⁾。この考えにもとづくと、今回分析対象としたマナー本において、19世紀から20世紀半ばにかけて「悪い」とされた言語は、集団の中心部にいる話者においてはまだ受け入れられていない状態で、言語変化の途上にあったものということになる。しかしながら現在では、例えば方言の使用や、一部の若者内での話しことばにおける *Ischwör (= Ich schwöre)*⁸⁾ のような音の飲み込みについては言語意識が変化し

7) この点について詳しくは、高田(2009)を参照。

8) Androutsopoulos (2001: 332)はこの表現を、「談話マーカー (Diskursmarker)」として捉えている。おおよそ「マジ」といった意味を持つこの表現は、もともと移民の談話において観察されていた (Keim 2007)。しかし Wiese (2012: 70f.)はこの表現をドイツ語の「若者ことば」と見なし、ドイツ語の発展と結びつけている。

つつあり、必ずしも「悪いドイツ語」とは言えなくなっていると言っても許されるであろう。ただしこの点については、より長期的かつ詳細な分析が必要である。

参考文献

一次文献⁹⁾

- Baudissin, Wolf Graf von/Baudissin, Eva Gräfin von (1901): *Spemanns goldenes Buch der Sitte. Eine Hauskunde für Jedermann*. Berlin/Stuttgart: W. Spemann.
- Berger, Otto (1895): *Der gute Ton. Das Buch des Anstandes und der guten Sitte. Ein unentbehrlicher Ratgeber für den gesellschaftlichen Verkehr*. Reutlingen: Enßlin & Laiblins Verlagsbuchh.
- Calm, Marie (1886): *Die Sitten der guten Gesellschaft. Ein Ratgeber für das Leben in und außer dem Hause*. Stuttgart: Engelhorn. J.
- Claudius, Georg Carl (1800): *Kurze Anweisung zur wahren feinen Lebensart, nebst den nöthigen Regeln der Etikette und des Wohlverhaltens in Gesellschaften für Jünglinge, die mit Glück in die Welt treten wollen*. Leipzig: Adam Friedrich Böhme.
- Ernst, Clara (1884): *Der Jungfrau feines und taktvolles Benehmen im häuslichen, gesellschaftlichen und öffentlichen Leben*. Mülheim: Verlag von Julius Bagel.
- Gleichen-Russwurm, Alexander von (1932): *Der gute Ton. Ein Ratgeber für richtiges Benehmen in allen Lebenslagen*. Leipzig: Hachmeister&Thal.
- Gontard, O. von (1904): *Wie soll ein weibliches Wesen sich benehmen, um einen Mann zu bezaubern? Praktische Ratschläge eines scharfen Beobachters*. München: Scholl. O. Th.
- Gratiolet, K.(1918): *Schliff und vornehme Lebensart*. Naumburg a.S.: Die Verlagsanstalt Schule des Lebens.
- Haluschka, Helene (1938): *Noch guter Ton? Ein Buch für Anständige*. Graz: Ulrich Mo-

9) 以下の一次文献はすべて、Digitale Bibliothek の Band 108 に収集された、Wener Zillig (Hg.) (2004): *Gutes Benehmen. Anstandsbücher von Knigge bis heute*. Berlin: Directmedia Publishing.から取った。したがって、論文中の表示ページ数は、Digitale Bibliothek Band 108 のものを指す。

sers Verlag.

Kallmann, Emma (1891): *Der gute Ton*. Berlin: Hugo Steinitz.

Nicolai, Carl (1815): *Über Selbstkunde, Menschenkenntniß und den Umgang mit den Menschen. Erster oder allgemeiner Theil. Zweite ganz umgearbeitete u. verb. Aufl.* Quedlinburg/Leipzig: Gottfried Basse.

Roeder, Fritz (1929): *Anstandslehre für den jungen Landwirt, besonders für die Schüler landwirtschaftlicher Lehranstalten*. Berlin: P. Parey, Verlagsbuchh.

Siede, Johann Christian (1797): *Versuch eines Leitfadens für Anstand, Solidität, Würde und männliche Schönheit. Der aufwachsenden männlichen Jugend geweiht von J. C. S. Dessau*: Heinrich Tänzer.

Vogt, Franz (1894): *Anstandsbüchlein für das Volk. Kurzgefasste Unterweisungen über das anständige Benehmen in verschiedenen Lebenslagen*. Donauwörth: Auer.

Volkland, Alfred (1941): *Überall gern gesehen. Neuzeitliche Ratschläge und Winke für gewinnendes Benehmen, gewandtes Auftreten und gute Umgangsformen*. Mühlhausen i. Thür.: Verlag von G. Danner.

Wedell, J. von (1897): *Wie soll ich mich benehmen? Ein Handbuch des guten Tones und der feinen Lebensart. In Aufnahmen nach dem Leben unter Mitwirkung hochgestellter Persönlichkeiten herausgegeben von J. v. W.* Stuttgart: Levy & Müller.

York, B. von (1893): *Lebenskunst. Die Sitten der guten Gesellschaft auf sittlich-ästhetischer Grundlage. Ein Ratgeber in allen Lebenslagen. Auf Anregung hervorragender Persönlichkeiten herausgegeben von B. v. York*. Leipzig: Adalbert Fischers Verlag.

二次文献

Androutsopoulos, Jannis (2001): „Ultra korregd Alder!“ Zur medialen Stilisierung und Popularisierung von ‚Türkendeutsch‘. In: Eroms, Hans-Werner/Harras, Gisela/Löffler, Heinrich/Stickel, Gerhard/Zifonun, Gisela (Hg.): *Deutsche Sprache* 4/2001. Berlin: Erich Schmidt Verlag, S. 321-339.

Davies, Winifred V./Langer, Nils (2006): *The Making of Bad Language. Lay Linguistic Stigmatisations in German: Past and Present*. Frankfurt am Main/Berlin/Bern/Bruxelles/New

York/Oxford/Wien: Peter Lang.

Keim, Inken (2007): *Die „türkischen Powergirls“: Lebenswelt und kommunikativer Stil einer Migrantinnengruppe in Mannheim*. Tübingen: G. Narr.

Kilian, Jörg/Niehr, Thomas/Schiewe, Jürgen (2010): *Sprachkritik. Ansätze und Methoden der kritischen Sprachbetrachtung*. Berlin/New York: de Gruyter.

Koch, Peter/Oesterreicher, Wulf (1985): Sprache der Nähe – Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch*, 36. Berlin/New York: de Gruyter, S. 15-43.

Koch, Peter/Oesterreicher, Wulf (1994): Schriftlichkeit und Sprache. In: Hartmut, Günther/Otto, Ludwig (Hg.): *Schrift und Schriftlichkeit: Ein interdisziplinäres Handbuch internationaler Forschung*, 1. Handband. Berlin: de Gruyter, S.587-604.

Linke, Angelika (1988): Die Kunst der ‚guten Unterhaltung‘: Bürgertum und Gesprächskultur im 19. Jahrhundert. In: *Zeitschrift für Germanistische Linguistik*. Band 16. Berlin: de Gruyter, S. 123-144.

Linke, Angelika (1996): *Sprachkultur und Bürgertum. Zur Mentalitätsgeschichte des 19. Jahrhunderts*. Stuttgart: Metzler.

Mattheier, Klaus J. (1998): Kommunikationsgeschichte des 19. Jahrhunderts. Überlegungen zum Forschungsstand und zu Perspektiven der Forschungsentwicklung. In: Cherubim, Dieter/Grosse, Siegfried/Mattheier, Klaus J. (Hg): *Sprache und bürgerliche Nation: Beiträge zur deutschen und europäischen Sprachgeschichte des 19. Jahrhunderts*. Berlin/New York: de Gruyter, S. 1-45.

Milroy, James (1992): *Linguistic Variation and Change: On the Historical Sociolinguistic of English*. Oxford: Blackwell.

Polenz, Peter von (1999): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Band3. 19. und 20. Jahrhundert*. Berlin/New York: de Gruyter.

シュミット、ヴィルヘルム (2004) 『総論 ドイツ語の歴史』西本美彦 (他) 訳、朝日出版社。

高田博行 (2009) 「歴史社会言語学の拓く地平—一人の姿が見える言語変化」〔『月刊言語』2009年2月号、34-41頁〕。

高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) (2011) 『歴史語用論入門—過去のコミュ

ニケーションを復元する』大修館書店。

田中翔太 (2011) 「トルコ系移民のドイツ語 „Kanak Sprach“ は誰のもの？—言語変種の混交、そして越境」〔『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 15 号、31-52 頁〕。

田中翔太 (2012) 「民族性を脱したトルコ系移民のドイツ語—その認知過程における言語学者とメディアの役割をめぐって」〔『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 16 号、81-104 頁〕。

Wiese, Heike (2012): *Kiezdeutsch. Ein neuer Dialekt entsteht*. München: Verlag C.H. Beck.

Zaimoglu, Feridun (1995): *Kanak Sprach: 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft*. Berlin: Rotbuch Verlag GmbH.

(たなか・しょうた 学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程)

Sprachbewusstsein in deutschen Anstandsbüchern Was wurde zum schlechten Deutsch gemacht?

SHOTA TANAKA

Das Bewusstsein der Sprache wandelt sich. Ein Beispiel dafür ist das Deutsch der türkischstämmigen Migranten in Deutschland, die sich dort seit Anfang der 1960er Jahre niedergelassen haben. Ihre Sprache wurde anfangs von der deutschen Gesellschaft als „schlechtes Deutsch“ bewertet. Aber durch die Veröffentlichung eines Buches von Zaimoglu (1995) zieht diese Sprachvariante verstärkt die Aufmerksamkeit auf sich. So wurde diese Sprache z.B. in deutschen TV-Medien häufig verwendet und deshalb von manchen deutschen Jugendlichen als *coole* Sprache bewertet. Es geschah also ein Wandel des Bewusstseins über diese Sprache bei diesen Jugendlichen. Eine Bewertung darüber, ob ein bestimmter Sprachausdruck oder eine bestimmte Sprachvarietät als „gut“ oder als „schlecht“ anzusehen ist, ist je nach der Kommunikationssituation unterschiedlich. Das Sprachbewusstsein wandelt sich durch „äußere“ sprachlichgeschichtliche Faktoren diachronisch.

Ich habe in diesem Aufsatz 17 Anstandsbücher, die von 1797 bis 1941 in deutschsprachigen Ländern publiziert wurden und in denen es relativ viel um den Anstand der Sprache geht, aus Sicht des Sprachbewusstseins analysiert. Eine Gemeinsamkeit der Autoren der Anstandsbücher ist es, dass sie weder Grammatiker noch Sprachwissenschaftler sind. Der Schwerpunkt dieses Aufsatzes ist es, das vergangene Sprachbewusstsein der „Laien“ zu beobachten. In Bezug auf die Einschränkung der Zeitspanne gibt es drei Gründe: Erstens gab es im 19. Jahrhundert in Deutschland eine große Veränderung der Kommunikationssituation durch Zuwachs der Stadtbevölkerung aus verschiedenen Sozialgruppen. Zweitens ist das 19. Jahrhundert, vor allem das Ende des 19. Jahrhunderts, die Zeit der Entwicklung des kritischen Sprachbewusstseins durch elitär rückwärtsgewandte Sprachkritiker. Drittens wird die Zeitspanne von 1945 als Beginn der

„deutschen Gegenwartssprache“ bezeichnet und daher habe ich meinen Untersuchungszeitraum auf die Zeit davor, also auf das Neuhochdeutsche eingeschränkt.

Durch die Analyse wurde klar, dass man in den analysierten Anstandsbüchern ein schlechtes Deutsch hauptsächlich nach vier großen sprachlichen Merkmalen sortieren kann, und zwar: 1) Dialekt, 2) Grammatische Fehler, 3) Fremdwörter und 4) Aussprache. Erstens soll man keinen Dialekt verwenden, da es sich „widerlich“ oder „besonders lächerlich“ anhöre. Zweitens soll man grammatische Fehler, genauer gesagt das Verwechseln von *mir* und *mich*, vermeiden, weil es nicht „grammatisch richtig“ sei. Drittens soll man, vor allem sollen junge Damen, darauf achten, Fremdwörter nicht „falsch anzuwenden“, da es „lächerlich“ klinge. Viertens soll man vermeiden, Silbe zu verschlucken. Aber in den jeweiligen Anstandsbüchern werden die jeweiligen sprachlichen Merkmale nur als „schlecht“ bezeichnet und die genauere pragmatische Kommunikationssituation wird nicht klar vorgestellt. Daraus kann man vermuten, dass auf diese vier Merkmale fokussiert wird, wenn Autoren der Anstandsbüchern, d.h. Nicht-Sprachwissenschaftler, auf die von ihnen selbst verwendete Sprache achten. Nach Linke (1988) spiegeln Anstandsbücher „idealtypische Verhaltensnormen“ der Gesellschaftskreise wider. Also ist es zu vermuten, egal, ob man die Sprache graphisch oder phonetisch verwendet, dass in den Anstandsbüchern verlangt wird, die Sprache, im Sinne von Koch/Oesterreicher (1985, 1994), „konzeptionell schriftlich“ zu verwenden.

In der Sprachkritik wäre die Sprache der Anstandsbüchern als „laienlinguistische Sprachkritik“ zu bezeichnen. Da hat sie eine Gemeinsamkeit mit dem Deutsch der türkischstämmigen Migranten. Das allgemeine Sprachbewusstsein der „Laien“ zu beobachten, kann auf die spätere Beobachtung eines Sprachwandels bezogen werden. Die Innovation der Sprache wird, nach Milroy (1992), von Sprechern gemacht. Sprecher, die die Sprache innovieren, existieren am Rande der Gesellschaft und die Sprache wird langsam von der relativ zentralen Gruppe akzeptiert. D.h., dass das „schlechte“ Deutsch der Anstandsbüchern in der damaligen Zeit noch nicht von den zentralen Gruppen akzeptiert wurde. In der Gegenwart wandelt sich jedoch das negative Sprachbewusstsein über z.B. Dialekte oder Verschlucken bestimmter Silbe. Aber um das genauer festzustellen, ist eine langfristige ausführliche Forschung erforderlich.

